

あいち病害虫情報 最新情報

令和3年4月16日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

ムギ類の病気

ムギ類赤かび病は、開花期から乳熟期に降雨が多く、気温が比較的高い(20~27℃)と急激に感染が拡大します。これから出穂を迎えるほ場では、今後の気象状況に注意し、開花期の防除を行いましょ。また、ムギ類赤かび病に適用がある薬剤の多くは、ムギ類赤さび病とうどんこ病にも適用があります。今作、既に使用した薬剤は避け、FRACコードを参考に、作用機構が異なる薬剤を選定するよう工夫しましょ。

生育が早いコムギほ場では、複数地域でうどんこ病が確認されており、上位葉まで発病しているほ場もあります。また、麦生育診断情報(3月16日現在、農総試作物研究部作物研究室)によれば、「きぬあかり」「ゆめあかり」ともに平年に比較して生育が早まっており、出穂期も平年比で「きぬあかり」は4~12日早く、「ゆめあかり」は4~9日早いと予測されています。病気の発生状況を注視し、適期防除に努めましょ。止葉や穂に進展すると稔実が悪くなるので、うどんこ病の発生しているほ場では、防除を行いましょ。

水稻の育苗期防除

普通期栽培のは種作業が始まります。次の1~7に注意して適正な種子消毒に努めましょ。

- 1 細菌性病害にも効果のあるテクリードCフロアブルなどを用いて、種子消毒を行いましょ。
- 2 種子消毒後の廃液は、適切に処理しましょ。浸漬処理後の廃液処理が困難な場合には、種子粉衣(湿粉衣法)や塗沫法などの消毒方法に切り替えましょ。また、エコホープDJなどの微生物農薬や温湯種子消毒を利用する方法もあります。ただし、微生物農薬による種子消毒は、薬液の温度が10℃以下、30℃以上では効果が劣るので、処理温度に注意しましょ。
- 3 浸漬処理法の場合、薬液温度は極端な低温にならないようしましょ。また、処理濃度と時間を守りましょ。
- 4 温湯種子消毒の場合、適切な処理温度、時間(例:60℃、10分)を守りましょ。
- 5 種子消毒後は病原菌の汚染がないよう管理しましょ。
- 6 出芽温度は30~32℃を守りましょ。
- 7 高温での浸種や長時間催芽は細菌感染を助長するので避けましょ。

イネ縞葉枯病対策

ヒメトビウンカ越冬世代のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、昨年よりも低い状況ですが、一部保毒虫率が高い地域もあります。あきたこまちやコシヒカリなど本病に対して感受性のある品種を移植栽培する場合は、生育初期の本病の感染を防ぐため、育苗箱施薬等でヒメトビウンカを防除しましょう。

落葉果樹の病害虫

ナシ黒星病は4月上旬の花そう基部での発生量は平年並です。また、ナシ赤星病の感染時期を迎えていますので、黒星病とともに防除しましょう。

モモを加害するクワシロカイガラムシの防除適期は、1齢幼虫の発生ピーク時です。昨年と比べ、防除適期が早くなっています。本日発表の「モモのカイガラムシ類情報第1号」を参考に、適期に防除しましょう。

果樹カメムシ類の飛来は平年並

果樹カメムシ（チャバネアオカメムシ）の飛来数は、越冬成虫量からおおよそ予測できます。今年のチャバネアオカメムシの越冬成虫量は平年並です。越冬成虫量に関する詳細は、4月2日発表の「果樹カメムシ類情報第1号」を参照してください。

果樹カメムシは夜温が上昇すると、活動が活発になります。今後の園内への飛来状況に注意しましょう。

ナシヒメシンクイの発生に注意！

フェロモントラップによるナシヒメシンクイ越冬世代成虫の誘殺ピークは平年と比べやや早く、誘殺量は多い状況です。詳細については、4月14日発表の「モモのナシヒメシンクイ情報第1号」を参照してください。

ウイルス媒介虫を施設外に出さないようにしましょう！

トマト黄化葉巻病やトマト黄化病、キュウリ黄化えそ病の防除対策の基本は、ウイルス媒介虫を「施設内に入れない」、「施設内で増やさない」、「施設外に出さない」の3つです。収穫期間中はウイルス媒介虫であるタバココナジラミ（トマト黄化葉巻病、トマト黄化病）やオンシツコナジラミ（トマト黄化病）、ミナミキイロアザミウマ（キュウリ黄化えそ病）の防除を徹底しましょう。なお、次作の感染源を減らすため、収穫終了後は残さを持ち出す前に施設を密閉して、ウイルス媒介虫を死滅させましょう。

フェロモントラップなどの各種調査データは、HP「あいち病害虫情報」（アドレス：<https://www.pref.aichi.jp/site/byogaichu/index.html>）を参照してください。

問合せ先 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室
TEL 0561-62-0085 内線471 FAX 0561-63-7820